

# 報 医 人 世 け



## 目 次

- 巻頭言 「医師連盟」  
気仙医師会会長 医療法人 天祐 うのうらクリニック  
院長 鷓 浦 哲 朗…………… 2
- 理事会報告
  - 令和 7 年度第 5 回理事会報告…………… 3  
(大船渡市・陸前高田市・住田町学校医配置票が続く)
  - 令和 7 年度第 6 回理事会報告…………… 10
- 随 想  
「もうすぐサッカーW杯」  
医療法人 勝久会理事長(兼)介護老人保健施設  
「気仙苑」施設長 阿 南 陽 二…………… 12
- 「私の低山奇行」  
岩手県立高田病院 副院長 中 山 明 里…………… 13
- 研修医日記  
「研修医一年目を振り返って」  
岩手県立大船渡病院 一年次研修医 藤 原 誠 生… 14
- 会員異動のお知らせ…………… 15
- 事務局日記…………… 16
- 編集後記…………… 18
- 表紙のことば…………… 18



第 172 号  
2026. 4. 25

気 仙 医 師 会  
岩手県大船渡市盛町字内ノ目 6 - 1  
TEL:0192-27-7727 FAX:0192-26-2429  
<http://kesen-med.or.jp/>

# 巻頭言



## 「医師連盟」

気仙医師会 会長  
医療法人 天佑 うのうらクリニック 院長

鵜浦哲朗

2月の第51回衆議院選挙は、高市自民党の歴史的な大勝で幕を閉じた。単独で2/3の議席を確保し、維新との連立の意味合いは薄くなった。しかし、維新への入閣の依頼は怠らない。状況が変わっても筋を通す、この誠実さが高市人気の根本だろうか。

もう直ぐ会長の任期を終え、次期会長に引き継ぐ。2年間はあっという間といった印象だ。任期中に2回の衆議院と1回の参議院選挙があった。令和6年10月の衆議院選挙は、石破自民党が大敗し少数与党に転落した。令和7年7月の参議院選挙は、日本医師会推薦の釜范敏先生が医療系団体トップの投票数で当選を果たし、医師会の存在感を示した。そして令和8年2月の衆議院選挙で高市自民党は大勝した。

日本の医療制度は、政府が定める公定価格（診療報酬）に基づいている。当たり前的事だが、医療環境改善のためには政治への働きかけが不可欠だ。

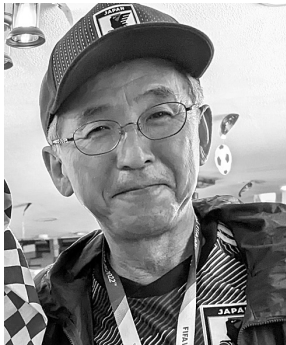
令和4年までの診療報酬は、医療費全体の引き下げムードにより、5期連続のマイナス改定であった。コロナ対応で感染症対策強化、医師の働き方改革の推進、地域医療の充実が求められ、オンライン診療やかかりつけ医の推進が点数化された。令和6年は、医療・介護・福祉の連携強化、医療DXの推進が求められ、デジタル化や医療従事者の待遇改善に繋がる評価料が新設された。

しかしながら、ここ数年の医療供給側の赤字、経営困難の状況は非常に深刻である。第一の原因は人件費の急増である。働き方改革に伴う医療職の人材不足や最低賃金の引上げ等の影響が強い。更に、物価、光熱費の高騰である。価格転嫁できずに病院は原価上昇をそのまま吸収して、経営は立ち行かない。コロナ後の受診控えという受診行動の変化も大きい。高齢化に伴う医療費の増額は、当たり前と思われるが、財政制約から診療報酬改定率はずっと抑制されてきた。

令和8年は、選挙前から高市政権により3%アップが予算計上されていた。これは令和7年7月の参議院選挙の結果が反映され医師会に有利に対応したのだろうか。2月の衆議院選挙の大勝により3%アップ実現の可能性は大である。気掛かりは、連立与党を組む維新の存在である。維新は、かねてから医療費の大幅削減を主張している。高市総理が余り維新に忖度しなければ良いのだが。

2年間の任期で感じた事は、医師連盟の活動の重要性である。政治に対する圧力団体としての医師会の活動は決して蔑ろに出来ない。診療報酬で決定される以上、政治活動への参加は避けられない現実である。県医師会の活動を目の当たりにしてその重要性を再確認した。

# 随 想



## 「もうすぐサッカーW杯」

医療法人 勝久会 理事長(兼)介護老人保健施設

「気仙苑」施設長 阿 南 陽 二

小学校で初めての担任の先生がサッカー選手だったのが、私をサッカー好きにした始まりでした。実業団のサッカーチームからの勧誘を断って、教師の道を選んだ先生で、天気がいいと、国語の時間をサッカーの時間に変えてしまうような先生でした。

スポ少など当時はなかったので、本格的にサッカーを始めたのは中学のクラブに入ってからですが、それはちょうど、1968年のメキシコ五輪で日本が銅メダルに輝き、高揚感にあふれていた時のことでした。

ただし五輪は、当時はアマチュアの大会でしたし、その後プロの参加が可能になったものの、23歳以下という条件付きの大会です。サッカーをする者・知る者にとって、真の世界一を競う最高峰の舞台はW杯だけですので、いつの日かこれを自分の目で見てみたいと、その存在を知った中学生の頃からずっと思い続けてきました。しかしその頃の日本サッカーは低迷し、メキシコ五輪以降、W杯はおろか五輪にさえ出場できない年月が続いていたため、W杯はあこがれるだけの遠い存在でしかありませんでした。

ところが「強くするにはプロリーグが必要」という考えのもと、1993年にJリーグがスタートしてから、日本のサッカーは前進を始めました。30年近く続いた「冬の時代」を抜け出し、94年アメリカW杯アジア予選の「ドーハの悲劇」(アディショナルタイムの失点で出場を逃す)を乗り越え、96年には28年ぶりに五輪に出場して「マイアミの奇跡」(ブラジルに勝利)を起こし、98年フランスW杯でついに初出場を果たしたのです。

W杯の現地観戦は、学生時代から意識し始めましたが、学生だった78年アルゼンチン、82年スペインはお金がなくて断念。86年メキシコ、90年イタリアは医師として修練中の身であったため叶いませんでした。94アメリカは忙しすぎて見合わせざるを得ず、98年フランスでようやく、日本代表の出場に背中を押されて、現地に行く決意を固めました。以来4年に一度、前回2022年カタールまで、連続7回、現地での観戦が続いています。

今回の北中米W杯は、カナダ、アメリカ、メキシコ3カ国の共同開催で、6月に開幕しますが、世界情勢は混沌としています。イランは日本とともに、アジア予選をトップ通過して出場権を得ており、グループリーグ3試合はロサンゼルスとシアトルで、ニュージーランド、ベルギー、エジプトと対戦する予定です。開催国が出場国に戦争をしかけているという、前代未聞の状況になっているわけです。果たしてイランは出場できるのか、難しいかもしれません。

大きなイベントはテロの格好の標的ですが、これまで2010年南アフリカや2014年ブラジルは治安の悪さが懸念されましたが、今回ほどリスクの高いW杯は過去にはなかったのではないかと思います。それでも観戦チケットさえ手に入れば、覚悟を決めて現地に向かうことになるでしょう。



## 「私の低山奇行」

岩手県立高田病院

副院長 中山明里

氷上山と五葉山に誘われて県立高田病院に赴任し、6年が経過しました。休みはほぼすべて登山に明け暮れており、ワークライフバランスの取れた充実の日々を過ごしています。一般的な方々とは異種の登山をしており、まさに「奇行」なのです。

登山を始めたのは学生時代ですが、当時から他の部員が憧れるような有名な山にはあまり魅力を感じず、東北地方の名前の変わった山を探しては登っていました。岩手県では、峠ノ神山・塚ノ神岳、七時雨山、六角牛山などに登っています。

県立磐井病院に2009年に赴任し、そのころから登山を再開しました。一関市の里山から登り始め、登山道がない里山にも藪をかき分けながら（藪こぎ）、片っ端から登りました。徐々に範囲を拡大し、やがて岩手県内の地図に名前がある山（約900）にすべて登ろうという壮大な目標を立てました。

とても達成できないと思っていましたが、徐々に難易度をあげていき、奥深く非常に難しい2山と立入禁止の3山を残して、岩手県はいったん終わりにしました。

その後に県外の北上山地の山も全制覇し、現在は青森県と秋田県を攻めています。青森県は350/450ほど、秋田県は380/630ほど制覇しました。車の走行距離は年間4万キロに達しています。

このほか、焼石岳、八幡平、早池峰山、五葉山、氷上山ではボランティア活動を行い、登山道や山小屋の整備を手伝っています。そんな中で、五葉山と氷上山にはそれぞれ100回以上登っており、気仙、釜石、気仙沼などの山友がたくさんできました。磐井病院からの転勤を思案しているときに、高田病院の前任者が転勤されるという話を聞き、ほぼ即決となった最大の背景要因なのです。

道なき山に登る楽しみとは、狙いを定めた山について綿密な攻略を練り、ときには現地偵察を繰り返し、遂に実行できたときの達成感です。地形図や航空写真などを詳細に検討して登れそうなルートを決めます。もちろん「登山口」までどう到達するかも問題です。積雪期は長い林道を歩かねばなりません。2-3年越しの山もありますが、そういう山を制覇できたときは大祝杯です。常に次の山のことを考えており、1年を通して気が休まることはありません。

「好きな山はどこか」とよく聞かれますが、山それぞれに個性があり、優劣つけがたく、お答えしないことにしています。同様に「お勧めの山は」という質問には、場所、標高、季節、経験などの条件を提示していただかないと答えようがありません。

道なき山ではこれまでに2回、クマに襲われかけましたが、幸いにもストックと大声で威嚇して撃退できました。登山といえば遭難や最近ではクマに襲われるリスクがありますが、「安全第一・登頂第二」をモットーとしています。

# 研修医日記



## 「研修医一年目を振り返って」

岩手県立大船渡病院 一年次研修医

藤原 誠 生

研修医として働き始めてから一年が経過しました。学生の頃は教科書や講義を通して医学を学んできましたが、実際に臨床の現場に立ってみると、教科書の知識だけでは対応できない場面が数多くあることを実感しました。この一年は、医学的知識だけでなく、医師としての責任や患者さんとの向き合い方を学ぶ非常に貴重な時間でした。

特に印象に残っているのは救急外来での経験です。研修を始めたばかりの頃は、患者さんが来院すると何を優先して行えば良いのか分からず、問診や診察にも時間がかかってしまうことが多かったです。症状を一つ一つ確認することに精一杯で、全体像を把握する余裕がなかったように思います。しかし、上級医の先生方からのフィードバックや、看護師さんや放射線技師さんなどの他職種の方々との意見交換などを通して、回数を重ねるごとに少しずつ患者さんの状態を全体として捉える視点を意識できるようになりました。救急外来では短時間で判断を求められる場面が多く、緊張することも多いですが、その経験を通して診療の基本を学ぶことが出来たと感じています。

また、患者さんとのコミュニケーションの重要性も強く実感しました。医学的根拠をもち正しくかつ安易な言葉で説明できる力だけでなく、患者さんやご家族の不安に寄り添いながら話をすることが大切であると学びました。ある患者さんの診療を担当した際、患者さんの不安に思っていることを傾聴した後に「こんなに親身になって話を聞いてくれたのは先生が初めてです。ありがとうございました」と言っていたことがありました。その言葉を聞いた時、医療は単に疾患を治療するだけでなく、患者さんの不安を軽減する役割もあるのだと改めて感じました。

一方で、自分の知識や経験の不足を痛感する場面も多くありました。患者さんの状態変化にすぐ気づくことが出来なかったり、検査や治療の適応について判断に迷ったりすることもありました。その度に指導医の先生方に相談し、多くの助言をいただきました。失敗や反省を通して学ぶことも多く、日々の振り返りが自分の成長につながっていると感じております。

さらに、この一年を通して医療がチームで成り立っていることを強く実感しました。看護師さんや検査技師さんなど、多くの職種の方々がそれぞれの専門性を活かしながら患者さんの診療に関わっています。自分一人では気づくことが出来なかったことを教えてくださることも多く、チーム医療の重要性を学ぶ機会となりました。

研修医としての一年目は、戸惑いや反省の連続でありましたが、それと同時に多くの学びを得ることができた一年でもありました。二年目の研修では、これまでに学んだ基礎を大切にしながら、より主体的に診療に関わることを目標としたいと考えております。また、常に学ぶ姿勢を忘れず、患者さん一人ひとりに誠実に向き合える医師になれるように努力を続けていきたいです。この一年間の経験を糧に、今後も更なる成長をしていきたいと考えております。

## ● 会員の異動

### 入 会

(B会員)

山 崎 里 美 先生 山崎内科医院 令和7年12月1日

佐 藤 敏 光 先生 (医) 勝久会 介護老人保健施設「松原苑」 令和7年12月1日

入会された先生方会員一同ご歓迎申し上げます。

### 退 会

(B会員)

久 夙 良 徳 彦 先生 岩手県立大船渡病院 令和8年3月31日

露久保 敬 嗣 先生 “ ”

(C会員)

犬 塚 一 誠 先生 “ ”

金 野 百合子 先生 “ ”

矢 崎 啓 先生 “ ”

退会される先生方大変お世話になりました。

新天地でのご活躍をご期待申し上げます。

## ◆ けせん医報へのご投稿募集 ◆

本誌は、気仙医師会の広報誌です。

年3回、4ヶ月ごとに発行しております。

会員の皆様や本誌をご覧になられてた方からのご投稿をお待ちしております。

セミナーや勉強会、各種医療活動、思い出、エピソード、感想、トピックスなど、ご自身が掲載を望むものがありましたら、是非、ご投稿下さい。お待ちしております。

詳しくは、下記までお問い合わせください。

気仙医師会広報部 事務局担当：寺澤・高淵

TEL : 0192-27-7727 FAX : 0192-26-2429

Email : mail@kesen-med.ne.jp